

男女共同参画社会の実現に向けて

らぶらす

Vol.

90

Aug

2025

Take Free

Interview

多様性はすでに存在するもの 両極化の中で対話を諦めないために

小説家 李琴峰

P.5

らぶらすコラム
水上文

P.6

Setagaya Information

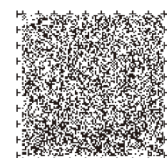
世田谷区パートナーシップ宣誓
10周年記念講演イベント

らぶらす授乳室のご案内

P.7

私の居場所 ～世田谷区で活動する団体紹介～
にじいろ子育てSetagaya

らぶらす施設紹介



音声
コード

この情報誌の表紙には、目の不自由な方などへの情報提供に役立てられている音声コードを印刷しています。「音声コード」は紙に掲載された印刷情報をデジタル情報に変えたシンボルで、約2cm角の中に日本語（漢字かな交じり）で約800文字の情報を記録することができます。専用の活字文字読み上げ装置を使用して音声で内容を聞き取ることができます。「音声コード」の横には、視覚障害の方が触覚によりコードの位置を把握できるよう、切り欠きを入れています。

らぶらす Vol.90 Aug 2025

編集・発行：世田谷区生活文化政策部 人権・男女共同参画課 2025年8月発行 世田谷区広報印刷物登録番号/第2395号
〒156-0043 東京都世田谷区松原6-3-5 TEL 03-6304-3453 FAX 03-6304-3710 URL <https://www.city.setagaya.lg.jp/>

制作：株式会社エイトワン

私の居場所 ～世田谷区で活動する団体紹介～

にじいろ子育てSetagaya

子どもと大人が集うLGBTQフレンドリーなひろば「にじいろおでかけひろば」を運営しています。LGBTQの親と子どもや、子どもを望む人、子育てに関わったり応援したい人など、みんなでわいわい集まれる居場所を目指しています。



どんなところ？

多様な家族に寄り添った「おでかけひろば」です。
子どもと大人が参加できるワークショップやイベントも行っています。
多様な家族の形を尊重し、みんなが安心して過ごせる場を作る工夫をしています。



詳しくはInstagram
(nijiirokosodate) にて！

日時	数ヶ月に一度の不定期開催（Instagramにてお知らせ）
開催時間	10:00 ～ 15:00 ※月によって変動することがあります。
対象	子育て中のLGBTQや多様な背景を持つ家族 多様な家族の在り方を尊重し、話したい・つながりを持ちたい人 ※参加者本人が当事者であるか、子育て中であるかは問いません。
場所	世田谷区内（最寄り駅より徒歩3分以内） ※プライバシー保護のため、お申込みいただいた方に住所等の詳細をお送りいたします。
参加費	大人／1,000円 子ども／無料
参加方法	事前予約制です。開催日時はInstagramアカウントからお知らせします。 アカウントに記載されているリンクからお申し込みください。

運営団体：にじいろ子育てSetagaya

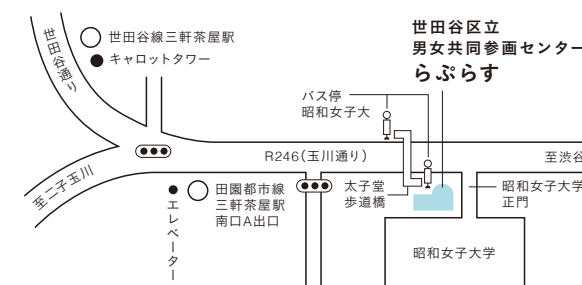
LGBTQフレンドリーな「にじいろおでかけひろば」を運営しています。地域で暮らす、多様な家族の形を知ってもらう活動もしています。

Email： nijikosodate@gmail.com

らぶらすは、男女共同参画社会実現のための拠点施設です

世田谷区立男女共同参画センターらぶらす

さまざまな講座・イベントを開催しているほか、生き方や働き方などに関する電話や面接での相談も充実しています。3階情報・交流コーナーは、予約なしで打合せや読書などに使えるスペースで、無料Wi-Fiも整備されています。



電車：東急田園都市線・世田谷線「三軒茶屋」駅下車徒歩7分

バス：東急バス・小田急バス「昭和女子大」下車

小田急バス（駒沢陸橋～北沢タウンホール）「三軒茶屋」下車

※駐輪場の利用をご希望される場合はらぶらすまでお問合せください



〒154-0004 東京都世田谷区太子堂1-12-40

グレート王寿ビル3～5階（受付3階）

TEL 03-6450-8510 FAX 03-6450-8511

<https://laplace-setagaya.net/>



X (旧 Twitter)



Instagram



らぶらすHP



世田谷区HP

目次から探す → 区政情報 → 施設 → 生活関連（男女共同参画、仕事探し、消費生活）施設 → 男女共同参画センター“らぶらす”のご案内





Interview — Li Kotomi

多様性はすでに存在するもの 両極化の中で対話を諦めないために

2017年に『独り舞』が群像新人文
賞の優秀作に選ばれて以降、『ポラリスが降
り注ぐ夜』で芸術選奨新人賞、『彼岸花が咲
く島』で芥川賞を受賞するなど、李琴峰さん
は作家として精力的に作品を発表し続け、
高く評価されてきた。

『独り舞』や『ポラリス』では性的マイノリテイ
として生きる現実や、その苦しさの根源を、
『彼岸花』では、架空の島に暮らす人々とそ
こに現れた一人の少女の交流を通じて、言語
や文化を超えた他者理解の可能性を描く。

李さん自身は台湾出身で、セクシュアル・
マイノリティの当事者だ。「多様性」が叫ばれる
時代の中で、少数者からの視点を描き続け
ることについて李さんは「これまでという
物語があまりにも少なかったから」と話す。
その視点から見える、この十年間と、今後の
未来とは。

小説家 李琴峰

Profile
1989年台湾生まれ。2013年来日。2017年、初めて第二言語
である日本語で書いた小説『独り舞』にて第60回群像新人文
学賞優秀作を受賞し、作家デビュー。2019年、小説『五つ数
えれば三日月が』で、第161回芥川龍之介賞、第41回野間文
芸新人賞候補に。2021年、小説『ポラリスが降り注ぐ夜』で、
第71回芸術選奨新人賞を受賞。小説『彼岸花が咲く島』で
第34回三島由紀夫賞候補、第165回芥川龍之介賞受賞。
ほかの作品に『星月夜(ほしつきよる)』『生を祝う』などがある。

インタビューを通して、李さんにとって関係性を築いたり、
他者との関わりを描いたりすることについて
大切にしていることをお聞きしたいと思っています。

『ポラリスが降り注ぐ夜』のあとがきに
「ただどうか忘れないでおいってください——あらゆる歴史
は現代史であり、あらゆる理解は誤解であるということ
を」という言葉があります。

ネット上のレビューを見てもここを抜き出して紹介して
いる方が多いのですが、まずここに込められた想いを
教えてください。

これは私が最初に言ったわけではなくて、前半と後半
はそれぞれ別のところで読んだと思います。では、どうい
うつもりで書いたかという、前半の「歴史は」という部
分は、私たちが歴史を見るとときには常に、私たち現代の
社会状況や政治状況がその視点に反映されているという
ことを強調したかったのです。『ポラリス』は性的少数者
を主役とする小説なんですけれども、クィアたちの歴史
を振り返ることができるようになったのは、私たちが今、
相対的に言って人権や平等を是とするような時代に生
きているからです。

後半の「理解は」という部分は、我々にとって他者とい
うのは結局他者に過ぎない、たとえば同じ日本人でも、女
性でもセクシュアル・マイノリティでも、レスビアンでも、
特定の属性に属しているからといって、同じ属性の他者
を完全に理解することは難しいでしょう。ましてやセク
シュアル・マイノリティの人たちの経験を、そうではない人
が完璧に理解するのは不可能だから、上辺の知識を得た
だけで「分かったつもり」になるほど危険なことではない。
そういう危険性を常に自覚してほしいという想いを、この
言葉に込めました。だからといって理解を諦めるのではな
くて、理解しようと努めながら、しかし理解には限界があ
るという前提を踏まえた上で、他者と接することが大事
なのではないかと思います。

以前の講演の中で李さんは「人間の多様性は、我々の想
像をはるかに超えているという事実を受け入れるところ
から始めないといけない」ともおっしゃっています。
自分の認識を検討し続けるという点で、今のお話とも
つながる部分ではないかと思いました。

日本において多様性という言葉が注目され始めたのは
ここ10数年だと思っています。最初は多様性を大事にするこ
と、ビジネスが発展して経済効果が得られるみたいな文脈で
語られ始めて、それが女性やLGBT、障害者の人権施
策につながりました。そういう背景があるからこそ、日本
では多様性に関する大事な前提が見落とされがちだと
思うんです。大前提として、多様性は「認めるか、認めな
いか」というものではなく、すでに存在するものなんです。
政治的な状況がどうあれ、思想や価値観がどうあれ、
多様性はすでにあるもの。

私たちは生まれつき顔も違うし、手足の長さも違う。
けれどそれがあまりにも当たり前になっているから、多様
性だと認識されていない。これまであまり意識されてこな
かった多様性としてLGBTなどに目が行きがちなので
すけれども、そうではないところで多様性はすでに溢れか
えっていて、存在しています。

私はたまに、講演で「多様性が認められないことのつら
さって何ですか?」というような質問をされるんですけども、
そういうときに私が常に考えるのは「多様性が認め
られないというのはそもそもどういう状況なのか」という
こと。多様性はすでに存在するものであって、認めるか認
めないかの問題ではないんですね。それを前提として踏ま
えた上で初めて、我々はどういう世界を作りたいかを考
えることができる。

こういう話をするときに、どうしても男性が女性がと
か、性的少数者がとか大きな主語で語りがちですけど
も、男性の中にもものすごい多様性があって、それは女性
もLGBTも同じです。しかし、そうした多様性について
はあまり語られていません。

——たしかにそうですね。

生物学においても多様性というのは、非常に重要な要
素です。生物に多様性がなければ環境に適応できずに滅
んでしまう。LGBTを否定する人たちはよく「生物学
的に間違っている」などと言いますが、むしろ多様性こそ
が生物学的な必然です。人間だけではなく生物全般に
ついて、多様性は必然的に生み出されるものです。

「多様性」が一部の人を示すものと理解されてしまったら
本末転倒ですね。

さて、李さんが来日されたのが2013年です。先ほど
「この10数年」というお話がありました。が、実際この10数年
で日本社会の中のジェンダーに関する意識はだいぶ変
わってきたように感じています。李さんにとってこの10年
ほどはどうだったかを教えてください。

おっしゃる通り、だいぶ変わったと思います。身近なと
ころだと渋谷区と世田谷区からパートナーシップ制度が
できました。日本社会が少しずつ前へ進んでいく時期に
日本に住めて良かったと思います。

ただ、作用と反作用があるので、社会を前に進めよう
とすると押しとどめようとする力学もまた存在します。
常にせめぎ合っている状態であり、それを間近に観察
してきた10年間だと思います。2015年にパートナ
ーシップ制度が実施されましたが、まさにその同じ年に
渋谷区で反同性愛のデモが行われました。

——まさに作用と反作用ですね。

2010年代と、2020年代の今って、見えている
ものが大きく違うと思います。社会は常に一進一退の中に
ありますが、2020年代の私たち、少なくとも私は、
より広い視点を持って今の変化を捉えることができる

ようになったという感覚があります

これまでの歴史になかったものがひとつあるとすれば、それはSNSがもたらしたグローバルズムではないかと思えます。これまでの歴史の中で、とある国の政治的な状況がこれほどのスピードで世界中に広がることはありませんでした。現在進行形でアメリカで起きていることが、すぐに日本に入ってくるようになりました。

SNSを通じて、いろんな人がいるというのを良くも悪くも知るようになったとたしかに感じています。

少し抽象的な質問になってしまっているのですが、「自分にとってわからないことを知る」ことについて、李さんが考えていることを教えてください。

わからないことがあるのは当たり前で、それを知るのは幸せなことだと思います。ですから、わからないことに對して謙虚でいようと思っています。

なにかについてわからないと認めるのは、人によっては



できますが、ある種の人には届かないんですね。これは嘘の話だからと切り捨てられて終わりという、そういう側面もあります。

ノンフィクションは事実であるというだけで力を持っている。フィクションでしか届かない層がいる一方で、ノンフィクションでしか届かない層もいる。どちらも必要ですね。

その両方の力を駆使して自分の伝えたいことを書いたのが『言葉の幸う国』という作品です。この作品にはフィクションの部分とノンフィクションの部分があって、どちらも大事だと私は思っています。

李さんが過去に答えていらしたインタビューの中で「共感には必要ではあるけれども、共感にすべての価値を置く」と結局マジョリティが共感するコンテンツが大量生産される」というお話をされていて、それは本当にそうだなと思います。

難しいのは、資本主義はそういう構造になっていることですよね。より多くの人の共感を得て、見ってもらうことが商品としての価値につながるというのが資本主義の論理ですが、そこを打破った先に何があるのか。私も答えはわからないんですけど、やっぱり多様性の問題に立ち返ることになると思います。

つまり、人間がこうも多様性にあふれているのに、文芸作品において多様な人間が描かれたいのはおかしい。そうした偏りを是正しようという話です。

資本主義の論理の中で商業的な成功につながるかどうかはもちろん大事ですけども、一番優先されるべきではないと私は思っています。

マイノリティに関する社会運動や支援を、すればするほど金銭的に余裕がなくなっていくような状況もあります。そういった中で李さんの小説が多くの人に読まれているのは希望にも感じます。

プライドが損なわれるような、あるいは自分が否定されたような感覚になることもかもしれません。でも決してそんなことはなく、私たち人間は誰でも自分の専門分野、詳しい分野があります。私はそれがたまたま文学だったり性的マイノリティだったりしますが、知らないことがあったとしても、その知識に触れる機会がなかったに過ぎません。わからないことを指摘されるのは恥ずかしいことではないという感覚は、もって共有されてほしいと思っています。

ただ、ひとつ指摘しておかなければならないのは。

—— 为什么呢。

例えば、相対性理論を分かっていないと指摘されても、大抵の人は恥ずかしいと思わないはずですよ。それなのに、ジェンダーや性的マイノリティのことを分かっていないと指摘されると、多くの人は力チンと来ます。

なぜかというと、相対性理論というのは頭のいい人たちの学問で、一般人は知らなくて当然だと思われがちです。だから知らないと言われても素直に受け止められます。一方で、フェミニズムやクィアスタディーズとなると、きちんと学んだことのない人でも「自分は分かっている」となぜか思ってしまう。要するに後者の知識の「格」が不当に低く見積もられがちですね。

性やジェンダーについてはそれぞれの経験から「自分もわかっている」と考えやすく、専門性がながしろにされがち」というのはあると思います。

話が少し戻りますが、わからないことを指摘されるのが怖いというのは「あなたは差別しています」と指摘されるのが嫌だという気持ちにも似ていると思います。SNSは差別的言動が可視化される場にもなっていますが、そこで差別を指摘されても認める人の方が少ないです。

過去10年間でわかったのは、SNS上で知らない人に

日本社会は残念ながらここ10年、若干みんな余裕がなくなってきたと感じています。社会的に抑圧されてきた人々を思いやりたり、不正な制度や構造を是正しようとしたりするためには余裕が必要です。心理的な余裕も、経済的な余裕も必要です。少し前の日本だったらもうちょっと余裕があったかもしれないけれど、みんな大変になってきていると私は感じています。そうした中でスケープゴートを探そうと、外国人などへの差別が激しくなっているのが心配です。

私がなぜセクシュアル・マイノリティの話を書き続けているのかというと、これまでそういう物語があまりにも少なかったからです。英語で言う「underrepresentation」、つまり過小代表ですね。現実的に存在するのに代表者が不足していて、表象されていない。そんな状況が文学の中にもあるので、それをなんとか是正しようとしている状況ですね。

状況を改善しようとする中でそれが商業的な成功につながれば万々歳ですけども、残念ながら現状はそうではない。でもだからといってやらないわけにはいかないと私は思います。私は必ずしも資本主義的な論理で動いているわけではなく、自分にとってこれがやりたいこと、やらなければいけないと思うているからやっています。

最後になりますが、社会が変化していく中で、10年後にどんな社会になっていたら良いと思うか、理想を教えてください。

現在の社会情勢を見ると、リベラルと保守派の人が対立し、インターネットやSNSの登場によって、その対立がより激しくなっています。その中で対話の可能性が失われていく。

本来であれば、人間同士は会話やコミュニケーションを通して、より良い方向性を見つけ出していくことができるはずなんですけれども、対立する社会の中でそれが難しくなっているのが状況です。民主主義の価値と、知の価

対して「それは差別ですよ」と言っても意味はないということですね。個々人が差別的な言動をしてしまうことはもちろんあるのですけれども、差別というのは個人の言動の問題というより、構造や体制、社会の問題だと考えたほうがいいと思います。

差別とは文化のようなもの。私たちは何の自覚もせず、に普段行動したり、ものを考えたりしますが、その際の傾向すべてが文化です。電車に乗るときに並ぶ、吊革につかまる、電車の中で歌ってはいけない、ダンスをしてはいけない。そういった行動様式の全般です。

それでは差別が文化になっているというのはどういう意味か。私たちは行動様式や思考様式をあらかじめ社会から教え込まれてきているし、決定づけられている。刷り込みのようなものです。結婚は男性と女性が行うものとか、性別は生涯変わらないものとか、私たちは子どもの頃からそう考えるように仕向けられてきました。女性は結婚して子どもを産み育てるのが幸せ、というのもそうです。

ですから、私たちが差別について本当に対処しなければならぬのは、そう考えることを仕向けてくる社会、そして文化です。個人に対して「それは差別だよ」という指摘が必要な場面もあると思いますが、それ自体が果たせる効果は全体で見ればそれほど大きくないのではないのでしょうか。広い視点で見ないと差別の実態は見えにくいと思います。

自分にはわからないことがあって当然というお話に戻りますが、他者を理解するにあたっての想像力を育むことができるのが小説などのフィクションではないかと考えます。ノンフィクションも大切ですが、事実ベースなので限界がある部分もあります。

私は小説家ですから、逆にフィクションは力が及ばないところがあると思うことがあります。たしかにフィクションはひとつの世界を作り上げて、その中で個別具体的な状況を書くことによって他者に対する共感を養うことが

値を、日本こそ大事にしていかなければならないと思っています。

私は昨年11月に、50人の小説家と合同で「LGBTQ+差別に反対する小説家の声明」を発表しました。この声明はまさしく分断と差別が横行する混沌の時代において、それでも光を灯そうとする一つの努力だと私は捉えています。ぜひ読んでいただきたいです。

(聞き手…小川たまか／ライター)

「LGBTQ+差別に反対する小説家の声明」につきましては、こちらをご覧ください。





世田谷区パートナーシップ宣誓 10周年記念講演イベントを開催！

一人ひとりの選択を尊重する社会へ

世田谷区が全国に先駆けて導入した「パートナーシップ宣誓」は、2025年11月に10周年を迎えます。これを記念して、ロバートキャンベルさんをお招きし、特別講演を行います。また、保坂展人さん（世田谷区長）と松信ひろみさん（駒澤大学文学部社会学科社会学専攻教授）を交えたパネルディスカッションも行います。イベントの詳細は9月にらぶらすホームページで公開予定です。



講師：ロバート キャンベル さん

ニューヨーク市出身。専門は江戸・明治時代の文学、特に江戸中期から明治の漢文学、芸術、思想などに関する研究を行う。主な編著に『戦争語彙集』（岩波書店）、『よむうつわ』（淡交社）、『日本古典と感染症』（角川ソフィア文庫、編）、『井上陽水英訳詞集』（講談社）、『東京百年物語』（岩波文庫）等がある。

日時	2025年10月19日（日） 14:00～16:00
会場	北沢タウンホール
対象	どなたでも
参加費	無料
申込	9月1日（月）10:00から、電話、FAX、 または、らぶらすホームページの申込フォームで受付 ※FAXの場合は ①講座名 ②氏名 ③電話番号

らぶらすセクシュアル・マイノリティ事業の紹介

にじいろひろば交流スペース

セクシュアル・マイノリティ当事者、そうかもしれない方、支援者、Ally（アライ）、ご家族など、みんなで集まって自由におしゃべりする会です。にじいろひろばスタッフも一緒に参加しますので、安心して遊びに来てください。

〈第4土曜日〉午後
※定期開催

セクシュアル・マイノリティのための世田谷にじいろひろば電話相談

セクシュアル・マイノリティについての電話相談です。当事者の方はもちろん、家族や友人、学校関係者など、どなたからの相談もお受けします。困っていること、わからないことをお気軽にご相談ください。小・中学生、高校生からの相談もお受けしています。相談は無料、秘密は厳守します。

〈第1、3金曜日〉14:00～17:00
〈第2、4金曜日〉18:00～21:00
TEL 03-6805-5875

セクシュアル・マイノリティ基礎講座の実施報告

2024年度には、「今さら聞けない？LGBTQ+についての基礎知識～子どもたちのために大人ができること～」をテーマに、古藤達也さん（一般社団法人にじずスタッフ）を講師にお迎えし、セクシュアル・マイノリティ基礎講座をおこないました。ご参加いただいた方からは「知識を深める機会となり、有意義な時間だった」「講座はもりもりでしたが、学びがあり良かったです！」といった声が寄せられ、とても好評でした。なお、2025年度も引き続き講座の開催を予定しております。詳細は決まり次第、ホームページにてご案内いたしますので、ぜひご確認ください。

らぶらす授乳室のご案内

利用方法：らぶらす3階の受付でご案内します

利用時間：9:00～20:00

※らぶらすの事業で使用している場合は、ご利用できません

利用料金：無料



取組み内容について、
詳しくは区ホームページをご覧ください
<https://www.city.setagaya.lg.jp/02409/9215.html>



世田谷区からのお知らせ



らぶらすコラム



わたしたちはここにいます。そうやって言わないと、「いない」ことにされてしまう気がする。

去年の春頃、わたしは3週間ほどカナダのトロントに滞在していた。トロントに住む恋人に会うためである。わたしたちは、国際遠距離カップルなのだ。毎日のようにラインやビデオ通話で会話していたけれど、実際に会うのはなかなか難しく、その時はおよそ3か月ぶりの再会だった。だからもちろんすごく楽しみで、それにカナダに行くこと自体にもわくわくしていた。

観光という意味だけではなく、カナダという国の生活にも興味があったのだ。わたしはひとりのクエアとして、およそ20年も前から同性婚も法制化されているトロントを訪れることに、胸を躍らせていたのである。

クエア——わたしは、自分のことを説明する時、そんな言葉を使っている。もともとは男性同性愛者に対する侮蔑語だったけれども、権利運動によって意味を塗り替えられ、いわゆる「普通」とされる性の在り方から外れるあらゆる人を表現し得るものになったその言葉。パートナーがノンバイナリー（自分を男性とも女性とも捉えていない人のこと）で、でも戸籍上わたしたちは「同性」で、だから同性婚ができない日本では結婚できない。そんな男女のカップルとはずいぶん違った関係を築いている自分を表現するために、びったりな言葉だと思ったから。異性愛者ではないけれど同性愛者でもない、そういうわたしには、他に自分を指す言葉をなかなか見つけられなかったのだ。

とにかく、そんなわけでわたしは、カナダに興味津々だった。そして実際、カナダは日本とはずいぶん違うと感じたのである。たとえば、恋人の友だちの家のホームパーティーに招いてもらったのだけれど、その家に住むふたりは新婚カップルだった。ふたりはノンバイナリーと女性のカップルで、精子提供で子どもを持つことを計画しているという。カナダとそれぞれのルーツの国で3回も結婚式を挙げたとも言っていて、わたしはびっくりしていた。

あと、日本では性的マイノリティの集まる場所といえば新宿二丁目が有名で、ゲイバーやレズビアンバーといった場所が思い浮かぶけれど、カナダにはそういう場所がないことにもびっくりした。ほとんどのバーやカフェが性的マイノリティのシンボルであるレインボーのステッカーを貼っていて、つまりどこにだって性的マイノリティがいることが想定されているし、実際の至る所で性的マイノリティらしき人を見かけることができるのだ。カナダだって完璧ではないだろうけど、それでもわたしはうらやましい、と感じる。わざわざ言わなくてもここに「いる」ことが前提になっていて、本当にうらやましい。

でも、日本にだって、どこにだってわたしたちは「いる」。もともと多くの人々がそれに慣れてくれればいいのに。その日が来るまで、わたしは言い続ける。ここにいます、と。

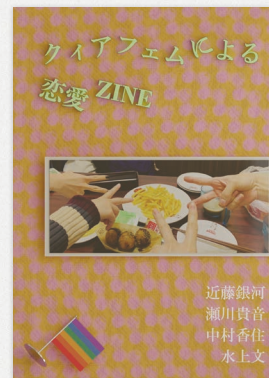
水上文 Aya Mizukami / Profile

1992年生まれ。文筆家。単著に『クエアのカナダ旅行記』（柏書房）、企画・編著に『われらはすでに共にある 反トランス差別ブックレット』（現代書館）。フェミニズム雑誌『エトセトラ vol.13』の特集「クエア・女性・コミュニティ」編集。

らぶらすライブラリー 所蔵案内

Laplace Library

らぶらすで水上文さんの著書が
読めます、借りられます！



『クエアフェムによる
恋愛ZINE』

クエアフェムによる恋愛ZINE編集部
2024年4月



『クエアのカナダ旅行記』

柏書房／2025年5月



『エトセトラ VOL.13 特集：
クエア・女性・コミュニティ』

エトセトラブックス／2025年5月